The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 証券用語の言語学的覚え書き |
| Author(s) | 中田, 一志 |
| Citation | 日本語・日本文化. 2002, 28, p. 1-28 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/4445 |
| rights | 本文データはCiNiiから複製したものである |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＜研究論文＞

# 証券用語の言語学的覚え書き

中田　一志

## はじめに

最近、いくつかの分野においてそこで使われる用語を言語学的に語彙概念的なアプローチで考察する研究が見られるようになった。たとえば、Levin 1993 の料理動詞や Matsumoto 2002 の園芸動詞に関する考察である。ともに英語の動詞に関するものであるが、興味深いのはこれらの動詞がしばしば空範疇を目的語にとるという指摘である。つぎの下線部の動詞（いわゆる指示的命令文の動詞）はその目的語に音形を持つ名詞句を取らない。一瞬、誤用かと見誤るが、そうではないらしい。

（1）　Bake the cake for 30 minutes.
　　= <u>Bake</u> for 30 minutes. (Levin 1993)

（2）　Seeds need darkness to germinate; <u>cover</u> completely with medium. (Matsumoto 2002)

日本語の動詞文では頻繁に空範疇が現れることができるので、それが特定の専門分野に特有の空範疇なのかどうかの判定が難しいように思われる。しかし、日本語において特定の分野の複合動詞やその名詞形、複合動名詞の語構成を見てみると、そこに英語の料理動詞や園芸動詞に見られるようなその分野に特有の文法現象を見いだすことができる。

そして、一般的な複合語（以下、複合動詞や複合動名詞に限定してこの語を用いる）の意味は一般の人にとって捉えやすいのに対して、ある専門の分野でいわゆる専門用語に分類される複合語はその分野に明るい人でなければ、意味が捉えにくいという印象がある。例を見ていただきたい。(3) は日本経済新聞での「売り込む」の用例で、(4) は一般の用例である。意味はそれぞれ (3)’ (4)’ に対応

する。このような意味の違いはどこからくるのか。また、どうして専門用語の意味は捉えにくいのかという疑問が生じてくる。そして、(3) では「売り込む」の目的語は「株」であるが、(1) (2) のようにそれがないのが通常である。

（3） 東京株式市場では 21 日、日経平均株価が大幅反発した。上げ幅は 461 円 29 銭と昨年来 6 番目、上昇率は 4.69%で、同 3 番目となった。27 日に予定される経済財政諮問会議の総合デフレ対策の発表とその後の日銀政策決定会合を前に、市場では売り込みにくい雰囲気が広がっており、先物や信用取引の売り方による買い戻しが広がった。終値は 1 万 295 円 42 銭と今年 1 月 11 日以来の水準を回復した。（日本経済新聞 2002 年 2 月 22 日日刊紙 1 面）

（4） 学習教材を小学校に売り込む。

（3）’先行きが値下がりすることを予測して、信用取引でどんどん売りに出ること。

（4）’〔宣伝したり 勧めたりして〕相手に買う気を起こさせて、売（ろうとする）。

本稿では専門用語の中から証券用語をケーススタディとして取り上げ、その中でも動詞から成る複合語に絞って、その語構成に考察を加える。また、最後に専門用語の定義について意見を述べようと思う。

## 証券用語概観

専門用語の定義によって証券用語の範囲も変わってくるだろうが、今は定義について突っ込んだ議論を差し控える。便宜的に市販されている証券用語辞典の中から『株式用語 1000 辞典』を選び、その用語を考察の対象とすることにする。採用の基準は解説書形式よりむしろ項目だての辞典形式に近い方が項目数を数える意味があるからである。この辞典は用語索引を設けているので、仮にその項目一つずつを専門用語と見なすことにする。

題目は『株式用語 1000』であるが、実際には項目数は 1349 ある。その中で一つでも動詞的な構成要素を含む用語は 751 項目あり[1]（付表）、「売り」「買い」などの対概念や「案内」「相談」などの類概念を一つの項目に立てているものが、そ

のうち10あるので、動詞的な構成要素からなる用語数は761である。つぎのリストはどんな動詞が構成成分としていくつの用語に登場するかを調べ、降順に並べたものである。動詞の構成要素としての造語力あるいは構成力といったものの順である。漢語の造語能力の高さを考慮に入れると、語種を区別せずに比較するのは公平ではないので、和語と漢語に分けた。

（5）　和語

55　買う

47　売る

11　回る

7　付く

6　押す、立ち会う、引く、戻す

5　上げる、建てる、引ける、含む

4　渡す、預かる、受ける、貸す、借りる、付ける、出来る、取る、投げる、引き受ける、もちあう（保ち合う）、持つ

3　合う、当てる、埋める、書き換える、食う、組み入れる、込む、下げる、放れる、もたれる、戻る、寄る

（6）　漢語

46　取引する

31　投資する

22　転換する、売買する

16　配当する

12　平均する

10　発行する

9　信用する、増資する

8　規制する、公開する、整理する

7　委託する、関連する、償還する

6　課税する、準備する、信託する、報告する

5　運用する、監査する、決済する、固定する、上場する、物色する、保証する、流動する

4　一服する、営業する、勘定する、管理する、決算する、分析する

3　一巡する、回転する、経営する、修正する、請求する、制限する、選択する、登録する、反騰する、反発する、評価する、分配する、分離する、暴落する、融資する、予想する、流通する、割引する

予想どおり和語の「売る」「買う」の構成力の高さがきわ立っている。漢語では漢語成分のみから作られる「信用取引口座設定約諾書」、「委託保証金維持率」や「経営保全命令」などといったものが大半であるが、つぎのように「物色する」、「一服する」や「一巡する」などは和語成分とも複合語を構成する。以下がその例である。この点も考慮に入れると和語成分の働きが大きいのが証券用語の一つの特徴だと言えるだろう。

（7）　物色買い、物色売り、上げ一服、下げ一服、買い一服、売り一巡、買い一巡、投げ一巡

**証券取引の構成要素**

証券取引を総体的な出来事だと考え、その出来事構造を考えてみることにする。

まず、取引をする agent として個人投資家から機関投資家まで規模は大きく異なるが、総称として投資家があげられる。（いわゆる仕手は投機的な玄人筋を指すので、ここでは相応しくない。）特に売るときは売り方、買うときは買い方と呼ばれる。

彼らは会社が発行する株を theme として売り買いする。特定の株は銘柄と呼ばれる。

基本的な動作は売りと買いであるが、一定の資金や株などを担保に証券会社から融資をうけて売買することができる。それが信用売りと信用買いである。

このような取引が行われる location は証券取引所であり、いわゆる市場である。

売り買いの背景には、売りと買いの需給関係によって株価が変動するという現象と、資金を元手に安く買って高く売れば、利益が生まれるのが基本原則である。

（8）　agent：投資家（証券会社を含む）、売り方、買い方
theme：株
action：売り、買い、信用売り、信用買い
location：市場
その他：株価、資金、利益

**証券用語の語構成――両動詞の項関係――**

普通の複合動詞は補部構造を持つ統語的な複合動詞と補部構造を持たない語彙的複合動詞があるとされている。統語的な複合動詞[2]と語彙的な複合動詞[3]を簡単に区別するのに、第一動詞に「そうする」を代入する方法がある。たとえば、(9a) のように動詞照応形である「そうする」がその動詞を受けることができれば、第一動詞「歩く」と第二動詞「始める」は構造的に別の節点に位置することが確認できる。そうでなければ、(9b) のように第一動詞「抱える」と第二動詞「上げる」は統語的に分離することが不可能であることを意味し、語彙的な意味の合成により複合動詞を作っているということができる。

（9）　a.　太郎はさらに歩き続けた。次郎もそうし始めた。
b.　太郎は子犬を抱え上げた。＊次郎もそうし上げた。

ここで、証券用語の語構成に目を転じてみることにする。今回は証券用語の中で頻度の多かった「売る」「買う」が構成要素となっている用語に絞って分析している。そして、一般に複合語の研究では、和語と和語からなる複合語が中心であるが、証券用語には複合動名詞の中に漢語と和語からなる複合語も相当数あるので、この組合せもあわせて対象とすることにする。もちろん、第一動詞が和語であれば、複合語の中でそれは連用形で第二動詞に承接し、漢語であれば、複合語の中でそれはサ変名詞の形で第二動詞に承接する。

一般語の語彙的複合動詞では、前項の動詞と後項の動詞の項が少なくとも一つ共有されているのが普通である。つぎの例の丸で囲んだ項が共有されており、「そうする」テストで第一動詞を「そうする」に置き換えられない。語彙的に一語相当になっているからである。

（10）　襲いかかる（様態）[4)]

襲う　agent,　patient

かかる　agent,　location/goal

（11）　たたき落とす（手段）[5)]

たたく　agent,　patient

おとす　agent,　patient

（12）　踏み固まる（原因）[6)]

踏む　agent,　patient

固まる　theme

（13）　泣き叫ぶ（対）[7)]

泣く　agent

叫ぶ　agent

（14）　譲り受ける（前段階）[8)]

譲る　agent-source,　~~theme,~~　goal

受ける　agent-goal,　~~theme,~~　source

証券用語にもこのような共有関係を持つ語彙的な複合語がある。項が共有されるため一語的な響きが強い。第一動詞の theme と第二動詞の theme が共有され、それが株であるものはつぎの通りである。複合語の語構成において共有される項、すなわち語構成に関わる項を並記すると、（株、株）の関係を持つものである。第一動詞の agent と第二動詞の agent はともに投資家であるが、それらも共有されている。しかしこの場合、それが語構成において特別な役割が与えられているようには思われない。第一動詞は大半が他動詞であるが、「循環買い」のように自動詞の例もある。

（15）　買い取り（請求）[i]、買い戻し[ii]、物色売り[iii]、物色買い[iv]、見直し買い[v]、選別買い[vi]、連想売り[vii]、連想買い[viii]、循環買い[ix]

---

下段に『株式用語 1000 辞典』の用語解説を載せておく。

i　買い取り請求：証券会社や投信販売会社が買い取った投信を、他の投資家に転売するか、投信委託会社に解約の手続きをするケース。

つぎの用語は第一動詞のgoalと第二動詞のthemeが共有されてできたものである。（株、株）の関係を持つ用語の変種として考えられよう。

（16）　飛びつき買い[x]

第一動詞のthemeと第二動詞のthemeが（株、株価）の関係になっている用語はつぎの通りである。ほとんどが他動詞同士の複合語であるが、「買い上がる」のような他動詞と非対格動詞の組合せも存在する。「売りくずし」や「売りたたく」は株を売ることによって株価を崩す／たたくことである。「売りたたく」は「買いたたく」（一般に値切って買うの意味）からの連想ではいけない。株を売って株価をたたくことである。「買いあおる」は株を買うことによって、株価をあおることであり、「買い支え」は株を買って株価を支え、「買い上がる」は株を買って株価が上がることである。

---

ii　買い戻し：信用取引の期間は6ヶ月と3ヶ月だから、売っていた分はそれまでに決済するが、その手じまいが買い戻しである。

iii　物色売り：業績がさえない銘柄や、悪材料のある株を選んで売ること。この場合、信用取引のカラ売りを意味するが、あまり使われていない。

iv　物色買い：物色とは、適当なものを探すこと。株式市場では、業績のよい銘柄、材料含みの銘柄を選び出して買うことをいう。

v　見直し買い：人気の圏外に放置されている株を、何かの材料をきっかけに見直して買うこと。そんな株は、えてして他の銘柄と比較すると、割安な株が多い。だから、割安といえる株を見直して買うことも、見直し買いという。

vi　選別買い：業績のよい銘柄、資産内容のよい銘柄、材料含みの銘柄などを選別して買うこと。

vii　連想売り：ある特定の銘柄に悪材料が出て、売られると、同業種、同業態の株にも似た要因があるのではないかと思って売られること。

viii　連想買い：ある特定の銘柄に好材料が出て買われると、同業種、業態の銘柄にも値上がりするのではないか、と期待して買われること。

ix　循環買い：ある銘柄、ある業種が買われて、株価が上がると、他の業種、銘柄に乗り換えて買っていく。そうなると、比較観から出遅れている銘柄が残ってくるので、それをさらに物色買いしていくことを指す。文字どおりの循環買いで、大相場には必ずこうしたことが繰り返されるものである。

x　飛びつき買い：相場が上昇を続けているとき、かなりの高値になったのに、まだまだ上値があると、急いで買うこと。

（17） 売りくずし[xi]、売りたたく[xii]、買いあおる[xiii]、買い支え[xiv]、買い上がる[xv]

つぎに、第一動詞の theme と第二動詞の theme が（株、株数）の関係である用語の類がある。第二動詞の theme は具体的には買いの株数、売りの株数、信用買いの株数、信用売りの株数である。「売り越し」とは株を売ることによって、売りの数量が買いの数量を「越す」ことを意味し、「買い越し」とは逆に株を買うことによって、買いの数量が売りを「越す」ことを意味する。また、「売り埋め」とは株を売ることによって、信用売りの数量を「埋める」ことであり、「買い埋め」とはその逆に株を買うことによって、信用買いの数量を「埋める」ことである。そして、「買い乗せ」はさらに信用買いをすることによって、その数量をそれまでの数量に「乗せる」ことを表し、「売り乗せ」はその逆にさらに信用売りをすることによって、その数量をそれまでの数量に「乗せる」ことを表している。

（18） 売り越し[xvi]、買い越し[xvii]、売り埋め、買い埋め[xviii]、買い乗せ[xix]、売り乗せ[xx]

つぎに、第一動詞の theme と第二動詞の theme が（株、市場）の関係である用語の類がある。「売りあき」とは株が売られ、市場が売りで飽和状態、「飽きた」

---

xi 売りくずし：売り方が悪材料をはやして、売り物をどんと増やし、相場が簡単に立ち直らないよう下落させること。

xii 売りたたく：信用取引で、売り物を浴びせて相場を下げることをいう。業績不振の銘柄に、売り物を集中して値ザヤ取りをする、たたき屋がいる。

xiii 買いあおる：経済実勢から遊離しているのは承知で、株価をつり上げようと投機的に買い進むこと。

xiv 買い支え：放置しておくと相場が下がるので、下落を防止するため、買いを入れること。大手業者がよくやるが、投資信託の買いが、実質的に買い支えとなるケースがよく見受けられる。

xv 買い上がる：相場の騰勢に乗って、さらに利幅を拡大しようと買い進むこと。投機相場の典型で、積極買い一本ヤリともいえる。

xvi 売り越し：買っていた投資家が、すべて売って手じまい、逆に、売りに転じることをいう。

xvii 買い越し：信用取引で売っていた投資家が、すべて買い戻して手じまい、逆に買いに転じることを買い越しという。

xviii 売り埋め・買い埋め：手じまいのことで、たとえば、カラ売りを買い埋めるといったようにいうが、現在ではあまり使用されていない。

状態になることであり、「買いあき（気分）」とは逆に株が買われ、市場が買いで「飽きた」状態になることである。「売り抜け」や「売り逃げ」は株を売って市場を抜けたり、市場から逃げたりすることである。この場合、第二動詞の項は source もしくは source 的な theme である。

(19)　売りあき[xxi]、買いあき（気分）[xxii]、売り逃げ、売り抜け[xxiii]

つぎに、第一動詞の theme と第二動詞の theme や location が（株、資金）の関係である用語の類がある。「売りつなぎ」とは信用取引で株を売ることによって資金を確実にする、資金を「つなぐ」策のことである。また、「買いぶら下がり」とは信用買いをして、それを売ることができないためそのままにしておく、資金に「ぶら下がった」状態におくことをいう。

(20)　売りつなぎ[xxiv]、買いぶら下がり[xxv]

第一動詞の theme が株であるが、それが共有されるのではなく、agent が共有されていると考えた方が良さそうな例がある。その場合、第二動詞の experiencer =

---

xix　買い乗せ：信用取引で買っている投資家が、思惑どおり値上がりしてきたので、さらに同一銘柄を買い増しすることを買い乗せという。

xx　売り乗せ：逆に、売りに回っている投資家が、値下げに拍車がかかるように、売り増やすことを売り乗せという。

xxi　売りあき：売り物が次々に出て、相場がどんどん下がっていく場合でも、いつまでも下げ放し状態が続くわけではない。そのうちに、売り物が少なくなって、相場が下げ止まることがある。こういったときに、売りあき気分が出てきたという。

xxii　買いあき気分：「買い疲れ」参照。（買い疲れ：相場が上がるのを期待して、見込み買いを続けたものの、それほど相場は上昇せず、買い気が薄れることで、買いあき気分ともいう。相場が上がっても、やや買い過ぎて一服したときも、買い疲れといわれる。）

xxiii　売り逃げ・売り抜け：相場は、必ずどこかで天井を打ち、反落するものであるが、買った株を下がる前に、うまく売ってしまうことをいう。

xxiv　売りつなぎ：保険つなぎ、ヘッジともいう。手持ち株の値下がりが予測される場合、信用取引でその株でも他の株でも売っておけば、値下がりしても、値ザヤがとれるから、損をしなくてもすむ。売りつなぎは、取引の関係で保有しているため手放しにくい株や、名義書き換えに出して手元に株がないときに利用される手段である。

投資家が共有されている。つまり、（投資家、投資家）の関係である。「買い安心」は投資家が株を買う（投資家＝agent）のに安心できる（投資家＝experiencer）状態であり、「買い疲れ」は投資家が株を買って（投資家＝agent）、疲れる（投資家＝experiencer）ことを意味する。

（21） 買い安心[xxvi]、買い疲れ[xxvii]

これまでは第一動詞が「売る」「買う」の用語であったが、もちろん第二動詞にこれらの動詞がくることもある。

第一動詞の theme と第二動詞の theme が（株価、株）の関係になっている用語の類がある。「戻り売り」は株価が元の値に戻ったときに株を売ることである。また、株価が目立つように、つまり「味付けする」ために株を買うことを「味付け買い」という。「値ぼれ買い」は第一動詞の theme＝株価が複合語に残った用語であるが、株価にほれて株を買うという意味で、他の２例とよく似ている。

（22） 戻り売り[xxviii]、味付け買い[xxix]、値ぼれ買い[xxx]

つぎに、第一動詞の theme と第二動詞の theme が（株数、株）の関係になっている用語がある。「手じまい売り」は信用買い株数を決済する＝「手じまう」ために株を売ることであり、「手じまい買い」は逆に信用売り株数を決済するため株を

---

xxv 買いぶら下がり：信用取引で買っていた株が値下がりしたとき、利食いもできず、さりとて投げる気もなく、買い残のままにしておく状態をいう。

xxvi 買い安心：上げ相場が続いて、買えば必ず差益が出るような状態。ひと相場あるときは、こうした局面がしばしばある。

xxvii 買い疲れ：相場が上がるのを期待して、見込み買いを続けたものの、それほど相場は上昇せず、買い気が薄れることで、買いあき気分ともいう。相場が上がっても、やや買い過ぎて一服したときも、買い疲れといわれる。

xxviii 戻り売り：下げた相場が反発し、値を戻したところで売ること。こうしたときは、戻り待ちの売り物もかなり多いので、これを消化できるかが、その後の相場展開のカギとなる。

xxix 味付け買い：市場全体の人気を引き立てたり、一部の業種、銘柄の人気を盛り上げるために買うこと。相場の見通しが不透明なとき、クロウト筋がよくやる手である。これで追随買いを誘って、相場にはずみをつけるのが狙い。呼び水のようなものである。

xxx 値ぼれ買い：この株は安いから上がると、文字どおり株価にほれて買うこと。

買うことである。

(23)　手じまい売り、手じまい買い[xxxi]

「値ぼれ買い」の「値」のように第一動詞の項を残したままできた複合語が他にもある。「利食い売り」である。第一動詞と第二動詞の theme は（利益、株）といった関係になっている。意味は利益を確保するため、つまり「食う」ために株を売るということである。

(24)　利食い売り[xxxii]

他に、第一動詞の theme と第二動詞の theme が（債権、株）の組合せの用語がある。「転換売り」である。転換社債などの社債が株に転換したとき、その株を売ることを意味する。この場合、第一動詞の theme-source が債権であり、goal が株である。従って、第一動詞の goal と第二動詞の theme が共有されてできた複合語だと考えた方がよかろう。

(25)　転換売り[xxxiii]

第二動詞のtheme＝株が複合語形成に貢献しているのではなく、第一動詞のagent もしくは experiencer と第二動詞の agent が共有されて複合語ができている類がある。（投資家、投資家）の関係になっているものである。「追撃売り」は売り方（投

---

xxxi　手じまい売り・手じまい買い：信用取引は、六ヶ月以内、もしくは三ヶ月以内に決済しなければならないが、買っていた分を決済するため売ることを手じまい売り、売っていた分を同じく買い戻すことを、手じまい買いという。

xxxii　利食い売り：株は、買えばよいというものではない。買い値より上がって、利が乗ったままでは果実を得たことにならない。利益が出た株を売ることを利食い売りというが、そのチャンスを狙うのが、株式投資であるといえよう。売るタイミングを強調するのは、売りそびれる一般投資家が多いからである。

xxxiii　転換売り：転換した株式を売ること。（転換社債：最初は、6～12年満期ものの社債として発行され、一定の据置き期間が過ぎると、株式にも転換することができる証券で、証券取引所に上場され、取り引きされている。（中略）わが国では、昭和24年 4 月に株式への転換価格が株式の額面と同じ額面転換社債が発行されたのが最初。が、投資家にとってメリットは大きいのに、普及しなかった。現在のような株式の時価を基準に転換価格が決められる時価転換社債の形式で発行されたのは、昭和41年9月の日本通運が第一号で、その後、転換社債は、すべてこの価格転換方式がとられている。）

資家）が買い方に追撃をかけるため、株を売ることであり、「防戦買い」は投資家が買い占め派に対して防戦するために、株を買うことである。また、「ろうばい売り」は投資家が相場の反落にろうばいして、株を売ることである。「追撃売り」と「防戦買い」は第一動詞が agent と第二動詞の agent が投資家である場合であり、「ろうばい売り」では第一動詞の experiencer と第二動詞の agent が 投資家で共有されている。

(26) 追撃売り[xxxiv]、防戦買い[xxxv]、ろうばい売り[xxxvi]

これまでのところで、証券用語の複合語と一般の複合語の違いについて言えそうなことをまとめておこう。「買い取り」は「中古車の買い取り」などと一般に使われるが、「買い取り請求」の形では投資信託に関わるものに限定される。証券用語という特殊な範疇の中に。そして、語構成に関わる要素が（株、株）や（投資家、投資家）のように同一で共有されるときは比較的一般の用語に近い。語構成に関わる要素が（株、株価）、（株、市場）、（株、資金）、（株価、株）、（株数、株）、（利益、株）、（債権、株）などの場合、先に見たような証券取引に関する何らかの背景知識が前提となっている。以上から、つぎの一般化が可能かと思われる。

（あ）証券用語のあるものは一般用語と比較すると、意味の範囲が限定される。

（い）証券用語のあるものは証券取引に関する背景知識が前提となっている。

## 証券用語の語構成——両動詞の構造的関係——

一般用語の語彙的複合動詞は第一動詞が第二動詞に対して付加的な関わりを

---

xxxiv 追撃売り：売り方が、買い方に追撃をかけるように、売りを浴びせることをいう。下げ相場が続いているときに、それとわかる売りがある。

xxxv 防戦買い：買い占めに対抗して株を買うこと。買い占め派は、値を冷やすため偽装売りもするので、買い向かい、値を上げて買い占めにくくする。別の意味で意図的に売られた場合に、買い向かうこともいう。

xxxvi ろうばい売り：堅調だった相場が、何かの悪材料をきっかけに急落したとき、送れてはならじと、あわてて売りに回る有様をいう。こういう状態は、相場が天井圏で、高値警戒人気が強いときに起こりやすい。

持っている。その関わり方は、第二動詞は動作や変化を表し、第一動詞は（10）～（14）のようにその様態、手段、原因、対、前段階となる動作や変化を表す。それでは、証券用語はどうだろうか。

証券用語の中で第二動詞が「売る」「買う」の場合、一般用語と同様に付加的に様態や手段を表す第一動詞を持つ語彙的複合語の用例が見られる。

つぎの用語の第一動詞は「どのようにして」の答えになるような動作や作用を表している。つまり、第二動詞に対して様態的な関わり方をしている。

（27）　物色売り（用語解説 iii を参照）、連想売り（vii）、循環買い（ix）、選別買い（vi）、飛びつき買い（x）、物色買い（人気）（iv）、連想買い（viii）

また、つぎの用語の第一動詞は「何をして」の答えになるような動作や作用を表している。つまり、第二動詞に対して手段／原因的な関わり方をしている。

（28）　売りくずし（xi）、売りたたく（vii）、売り乗せ（xx）、買いあおる（xiii）、買い支え（xiv）、買い乗せ（xx）

その他に、構造的な複合語だと考えられるが、時間副詞節に当たるような第一動詞を持つ複合語が見られる。「転換売り」は社債などの債権が株に転換したとき、その株を売ることであり、「戻り売り」は株価が戻ったとき、その株を売ることであり、「買い安心」は株を買うとき安心できる状態のことである。

（29）　転換売り（xxxiii）、戻り売り（xxviii）、買い安心（xxvi）

つぎの例は目的副詞節に当たるような第一動詞を持つ複合語である。「処分売り」は株を処分するために、それを売ることであり、「換金売り」は株を換金するため、「追撃売り」は買い方に追撃するため、「利食い売り」は利益を手に入れるため、「味付け買い」は銘柄に味を付けるため、「防戦買い」は買い占めに防戦するための行動である。「手じまい売り」は買っていた株を決済するため株を売ることで、「手じまい買い」は売っていた株を決済するため株を買うことである。

（30）　処分売り[xxxvii]、換金売り[xxxviii]、追撃売り（xxxiv）、利食い売り（xxxii）、味付け買い（xxix）、防戦買い（xxxv）、手じまい売り（xxxi）、手じまい買い（xxxi）

---

xxxvii 処分売り：買った株が値下がりしたが、資金繰りなどの関係で手持ちができず、処分すること。3月は決算期で、処分売りの出ることが多い。それが、相場を頭打ちにすることがある。

つぎの例は理由副詞節に当たるような第一動詞を持つ複合語である。「売りあき」は株が売られることが理由で、市場が飽きることである。「買いあき」は逆に株が買われることが原因で、市場が飽きることで、「買い疲れ」は株が買われることが原因で、市場が疲れることである。「ろうばい売り」は投資家がろうばいしたことが原因で、株が売られることである。「買い上がる」は株が買うことが原因で、株価が上がることである。「値ぼれ買い」は株価にほれたのが原因で株を買うことである。

この理由副詞節的な第一動詞と語彙的な複合語に分類される原因を表す第一動詞は違うものである。たとえば（12）の「踏み固まる」は直接的な因果関係を持っているが、「売りあきる」などはそうではない。「売る」という行為が結果的に市場を飽和させることになるかもしれないという程度の理由である。この相違が語彙的複合語と構造的複合語の意味の違いでもある。

（31） 売りあき（xxi）、買いあき（気分）（xxi）、買い疲れ（xxvii）、ろうばい売り（xxxvi）、買い上がる（xv）、値ぼれ買い（xxx）

つぎの例は手段を表すテ形接続節に当たるような第一動詞を持つ複合語である。語彙的な複合語にも第一動詞が手段を表すものがあった。たとえば（11）の「たたき落とす」や（57）の「売りくずし」である。第一動詞は第二動詞の結果を出すための直接的な手段を表している。たたくとゴミが落ちるという関係があるし、（大量の）株が売られると株価が崩れるという相関関係がある。しかし構造的な手段節はそうではない。「売り埋め」は株を売ることによって、信用買い（借金）を埋めることで、借金を埋めるためには手持ちの株を売ることは必要かもしれないが、それが借金を補填できるかどうかは分からない。「買い埋め」は逆に株を買うことによって、信用売り（借金）を埋めることである。同様に手段が目的遂行できるか分からない。「売りつなぎ」は手持ち株を売ることによって、手持ちの資金をつなぐことである。「売り逃げ」「売り抜け」は手持ち株を売ることによって、市場から逃げる／抜けることである。

---

xxxviii 換金売り：個人、法人を問わず、おカネが必要で手持ち株を売ること。相場を崩す原因となる。金詰まり期に、資金目当てのため、法人の換金売りで相場が下落したことは多い。

(32)　売り埋め（xviii）、買い埋め（xviii）、売りつなぎ（xxiv）、売り逃げ（xxiii）、売り抜け（xxiii）

つぎの複合語は第一動詞が第二動詞の主語位置に埋め込まれている例である。第一動詞はすべて株を売ること／買うことを表しており、それが第二動詞の主語位置のある解釈になるので、結局、独立した名詞の「売り」「買い」である。「売り一巡」「買い一巡」は売り／買いが一巡すること、「売り越し」「買い越し」は売り／買いがそれぞれ買い／売りを越えていること、「売り込み」は売りが市場に込んでいることを意味する。「買い一服」は買いが一服する、つまり止まること、「買いぶら下がり」は買いが手持ち資金にぶら下がった状態にしておく、つまり買ったままにしておくこと、「買い細る」は買いが細ること、つまり減ること、「買いもたれ」は買いがもたれること、つまり買いすぎて手持ちが増えすぎることである。

(33)　売り一巡[xxxix]、買い一巡[xl]、売り越し（xvi）、買い越し（xvi）、売り込み[xli]、買い一服[xlii]、買いぶら下がり（xxv）、買い細る[xliii]、買いもたれ[xliv]

つぎの複合語は第一動詞が第二動詞の目的語位置に埋め込まれている例である。これは一般用語にもよくある統語的な複合語に属するものであろう。「買い手控え」「売り手控え」は株を買うこと／売ることを控えることで、「売り直し」は

---

xxxix　売り一巡：目先的に売り物が、ひとわたり出て、止まることをいう。

xl　買い一巡：銘柄を替え、業種を替えながら続いていた目先的な買い物が、一巡して止まることをいう。

xli　売り込み・売り込み銘柄：先行き値下がりすることを予測して、信用取引でどんどん売りに出ることをいう。信用売りの多い銘柄を指して、売り込み銘柄という。このように、売り込みがある株は、手じまい買いによって反騰することがある。

xlii　一服：相場の動きが、一息入れるように止まること。上げ相場の場合は上げ一服、商いが細ければ買い一服などという。下げ相場の場合にも、下げ一服といった場面がある。相場は、年中、激しい動きをしているわけではない。投資家も、休養が大切である。

xliii　買い細る：買い気が消え、商いが減ること。

xliv　買いもたれ：商いが盛んで、相場は上がったが、どの投資層も手持ち株が増え、買いすぎた状態。大相場の末期には、こうなることが多い。

株を売ることをもう一度することである。

(34)　買い手控え、売り手控え[xlv]、売り直し[xlvi]

前に「そうする」テストによる語彙的複合語と統語的複合語の区別の仕方について述べた。一般の複合語を作る動詞は先に見た局面動詞「～続ける」の他に、「～かねる」のような非局面動詞がある。そこでは複合動詞は第一動詞が第二動詞の補部構造に埋め込まれるという構造を持っている。ここで見た統語的な複合語には、第一動詞が副詞節（時・目的・理由・手段）や主語位置や目的語位置にあるのと同じ働きをする例があった。「そうする」テストは統語的複合動詞を見つける万能な方法ではない。第一動詞が副詞節の時はもちろん「そうする」で置き換えられないし、主語位置のときも然り。目的語位置のとき「売り直す」は代用形「そうし直す」が可能であるが、「買い／売り手控える」は「そうし手控える」が不可能である。前者が可能で、後者が不可能なのは、前者の第一動詞を名詞として扱うと「売りを直す」で、不自然である。後者の第一動詞を名詞として扱うと「買い／売りを手控える」で、もとの表現と同じ意味である。(34) はすべて構造的には均しく第一動詞が第二動詞の補部構造に埋め込まれているように見えるが、「買い／売り手控え」は「買い」「売り」が独立した名詞相当語句になっているのである。

以上、第一動詞と第二動詞の構造的な関わり方を見てきた。一般の用語は統語的な複合語にしても語彙的な複合語にしてもその種類が限定されている。おそらく認知的に単純で一般的な構造を持つのであろう。それに対して、証券用語は統語的な複合語において語構成が豊富にある。そのため、はじめに見た「売り込む」の例に代表されるような一般用語と証券用語の差異が生じるのである。ここで観

---

xlv　手控え：これといった材料もなく、株式市場を取り巻く情勢にも大して変化がないとき、また、不透明なとき、投資家が売りも買いも仕掛けず、見送ることをいう。買い手控え、売り手控えなどと、買い方、売り方双方の動向によって使い分けてもいる。

xlvi　売り直し：信用取引で売っていたものを、いったん買い戻したあと、再び信用売りすること。手じまいしてはみたものの、業績が予想外によくないといった悪材料が出てきたときに、売り直すといったケースがある。

察した証券用語の特徴を一般化すると、つぎのようになる。

（う）証券用語には一般用語と比較して豊富な語構成のバリエーションがある。

## 終わりに

最後に、証券用語の特徴を再考しながら、専門用語について少し考えてみよう。証券用語にはつぎのような特徴があった。

（あ）証券用語のあるものは一般用語と比較すると、意味の範囲が限定される。

（い）証券用語のあるものは証券取引に関する背景知識が前提となっている。

（う）証券用語には一般用語と比較して豊富な語構成のバリエーションがある。

この三つの特徴を見ていると、（あ）と（う）は（い）から説明できるのではないかと思われる。つまり、専門用語にはその分野特有の常識がある。証券用語では（8）のような証券取引の構造がある。その常識によってあるときは縮小方向に働き、またあるときは拡張方向に働く。用語の専門的な意味はそこの常識が通用する範囲に絞られ、用語の語構成はそこの常識が普通は困難な語構成をも支えることができる。

専門用語はその分野での使用頻度が大きな指標となるであろうが、このような言語学的な観点もおもしろい基準になるのではなかろうか。

### 註

1）動詞的な構成要素を含む項目であるが、つぎの項目は除いた。「いのち金には手をつけるな」のような格言、「追加型」のような名詞化接辞が付加されたもの。

2）統語的な複合動詞の後項には局面動詞だけでなく、そうでない動詞も現れる。(Matsumoto 1996)

以下、例をあげておく。

局面動詞：はじめる、おわる、おえる、つづける、かける、だす、まくる、きる、ぬく

非局面動詞：かねる、そびれる、そこなう、そこねる、すぎる、なおす、かえす、

わすれる、まちがう、まちがえる、あきる、なれる

3) 語彙的な複合動詞は後項の動詞が複合動詞の主部に当たるのが通常であるが、例外的に第二動詞が動詞性を欠落している場合、第一動詞が主部になる。(Matsumoto 1996)

(例) 叱りつける、投げつける、踏みつける、睨みつける、思いつく、考えつく、引き返す、取り返す、怒鳴り立てる、責め立てる、疲れ果てる、悩み果てる、黙り込む、老け込む、読み上げる、歌い上げる、晴れ渡る、響き渡る

反対に第一動詞の動詞性が失われて第二動詞が主部となる複合動詞もある。

(例) 差し迫る、差し押さえる、差し止める

4) 第一動詞が第二動詞の表す動作や作用の様態を表す例は以下の通りである。(Matsumoto 1996)

(例) 流れ落ちる、舞い降りる、舞い上がる、垂れ下がる、跳ね返る、立ち並ぶ、襲いかかる、斬りかかる、噛みつく、かじりつく、踏みとどまる、たどり着く、攻め入る、忍び入る、分け入る、攻め込む、殴り込む、怒鳴り込む、連れ去る、食べ歩く、飲み歩く、歌い歩く、連れ歩く、尋ね歩く、呼び回る、探し回る、集め回る、求め行く、持ち歩く、持ち去る、持ち帰る、持ち寄る、持ち込む、捨て去る、告げ回る、届け出る、願い出る、訴え出る、運び回る、運び降りる、運び上がる、運び去る、運び込む、駆け上がる、駆け下りる、這い上る、駆け回る、飛び回る、浮かれ歩く、酔っぱらい歩く、持ち上げる、抱え上げる、乗り上げる、乗り入れる、飲み明かす、語り明かす、乗り越す、舞い上がる、垂れ下がる、跳ね返る

5) 第一動詞が第二動詞の表す動作や作用の手段を表す例は以下の通りである。(Matsumoto 1996)

(例) 言い逃れる、投げ勝つ、打ち勝つ、殴り殺す、押し開ける、たたき壊す、踏み固まる、書き上げる、縫い上げる、焼き上げる、むしり取る、投げ倒す、蹴り上げる、打ち上げる、吸い上げる、言い伝える、貼り付ける、押し倒す、たたき落とす、打ち落とす、焼き付ける、縫いつける、飲み込む、打ち込む、突き上げる、突き刺す、だまし取る、洗い落とす、言い負かす、言いくるめる、食いつぶす、飲みつぶす、塗りつける、ふき取る、そり落とす、掘り出す

6) 第一動詞が第二動詞の表す動作や作用の原因を表す例は以下の通りである。(Matsumoto 1996)

(例) 焼け死ぬ、溺れ死ぬ、寝静まる、寝ぼける、焼き上がる、焦げ上がる、崩れ落ちる、焼け落ちる、踏み固まる、折り曲がる、煮詰まる、取り揃える、書き上がる、縫い上がる、洗い上がる、仕上がる、焼き上がる、炊き上がる、作り上がる、打ち上がる、吸い上がる、突き上がる、積み上がる、吊り下がる、突き刺さる、言

い伝わる、張り付く、焼き付く、結び付く、歩きくたびれる、走り疲れる、働き疲れる、戦い滅びる、戦い破れる、飲みつぶれる、飲み倒れる、食いつぶれる

7）第一動詞、第二動詞がともに同じ種類の動詞であり、それらを対にした複合動詞の例は以下の通りである。(Matsumoto 1996)

（例）光り輝く、浮かれ騒ぐ、泣き騒ぐ、飛び跳ねる

8）第一動詞が第二動詞の表す動作や作用の前段階を表す複合動詞の例は以下の通りである。(Matsumoto 1996)

（例）乗り捨てる、吐き捨てる、乗り換える、畳み込む、丸め込む、刻み込む、譲り受ける、申し受ける

## 参考文献

石井正彦 1989「専門用語の語構成」『日本語学』8-4　明治書院

影山太郎 1996『動詞意味論』　くろしお出版

柴田武 1997「日常言語と専門用語」『日本語学』16-2　明治書院

野村雅昭、石井正彦 1997「学術用語の量的構造」『日本語学』16-2　明治書院

Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago: The University of Chicago Press.

Matsumoto, Masami. 2002. Gardening vs. Cooking: Verbs, Styles, and Event Structures. Ms., Kansai Lexicon Project, Kwansei Gakuin University.

Matsumoto, Yo. 1996. *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. Stanford: CSLI Publications & Tokyo: Kurosio Publishers.

## 辞典

『新明解国語辞典』第5版　三省堂

『最新株式用語1000辞典』中邑悟著　日本実業出版社

本研究は平成13年度科学研究費補助金奨励研究（A）の成果の一部である。

〈キーワード〉証券用語，専門用語，語構成

**付表：動詞成分を持つ証券用語**

相対売買
アク抜け
上げ足
上げ一服
足取り
味付け買い
預り資産
預り証不発行制度
頭打ち
当たる
アヤ戻し（押し）
安定株主
安定操作
異常株価開示制度
委託手数料
委託売買業務
委託保証金
委託保証金維持率
委託保証金率
一部指定基準
一割転換投資法
いってこい
一服
移動平均線
違法配当
いや気投げ
いや気売り
インサイダー取引
インターネット取引
インデックス運用
受け取り金利
受け渡し
受渡計算書
生まれ株
埋める
売りあき
売上債権
売り安心
売り一巡
売り埋め
売り方
売り方日歩
売り玉
売りくずし
売り気配
売り越し
売り込み
売り込み銘柄
売り材料
売り残
売り相場
売りたい強気
売りたたく
売り建て玉
売り出し価格
売り長
売りつなぎ
売り手控え
売り直し
売り逃げ
売り抜け
売り乗せ
売り場
売り本尊
上値抵抗線
上放れ
運用
運用対象
営業姿勢
営業特金
営業報告書
営業利益
益出しクロス
縁故募集
円銭表示
追い証
応募者利回り
往来相場
大蔵省の規制緩和
大引け
押し目
押し目買い
押し目待ち
オプション取引
思惑買い
親引け
織り込み済み
終値
買いあおる
買い上がる
買いあき気分
買い安心
買い一巡
買い一服
会員別増し担保
買い埋め
買掛金
買い方
買い方支払い金利

外貨建て外国投信
外貨建て転換社債
買い玉
会計監査人
買い気配
外国株海外取引
外国株組み入れ比率
外国株国内取引
外国株上場基準
外国株店頭取引
外国株取引
外国株為替決済制度
外国証券取引口座
買い越し
買い材料
買い支え
買い残
買い占め
会社更生法
会社分析
外人主導相場
外人投資
買いたい弱気
買い建て玉
買い長
買い疲れ
買い手控え
回転商い
買い取り請求
買い乗せ
買い場
買いぶら下がり
買い本尊
買い細る
買いもたれ
買い戻し
解約
解約請求
乖離率
換物買い相場
顔合わせ
格付け
格付け機関
格付けの影響
確定利付き証券
額面転換社債
額面発行
額面割れ
貸し株
貸し株代わり金利
仮装売買
肩代わり
過当取引
金あまり相場
株価・売買高基準
株価維持政策
株価規制
株価指数先物取引
株価操作
株価の里帰り
株価連動銘柄
株券預り証
株式組み入れ比率
株式交換制度
株式公開
株式相続税
株式投資収益率
株式の持ち合い
株式配当
株式評価損
株式分割
株式分割余力
株式分布
株式変動準備金
株式ミニ投資
株式累積投資
株主安定工作
株主勘定
株主構成
株主代表訴訟
株主の構成比率
株主優遇策
株主優先募入
株主優待制度
株主割り当て増資
株不足
通い相場
カラ売り（買い）
カラ売り比率
借方・貸方
借り株
借り株残
環境関連株
換金売り
監査意見
監査証明
監査報告書
監査法人
完全無担保転換社債
監理ポスト
元本確保型商品
議決権

期日圧迫
期日売り
規制基準
規制銘柄
記念配当
気乗り場
期末配当
気迷い人気
逆張り
逆粉飾
急伸
急騰
急反発
急反落
急落
玉締め
玉整理
切り返す
金融危機管理審査委員会
金融機能安定化対策
金融先物取引法
金融罰則整備法
金融持ち株会社
食い合い
食い逃げ増資
苦情相談室
くずれる
繰り上げ償還
繰り延べ資産
グループ別分析
グローバル投資
経営参加権
経営保全命令
経過利子
景気診断
契約型
決算
決算相場
ケツ入れ
月次報告書
月末整理
月曜ぼけ
減価償却費
減額修正
現金配当
兼業業務
建設株
源泉分離課税
源泉分離選択申告書
減資
現実買い
限定意見
減配
現引き
権利（新株）落ち
権利（新株）付き商い
権利行使価格
権利処理
権利処理価格
現渡し
公開買い付け制（TOB）
公開価格
公開株
公開株入札制度
公開販売ファンド
高株価経営
口座の分別管理
公社債引受協会
更新差益
公募
公募価格
公募価格割れ
小締まる
固定資産
固定比率
固定負債
小幅往来
個別規制
小戻す
採算買い
最終利回り
催促相場
裁定取引
債務超過
材料出つくし
材料含み株
材料待ち
先物買い
先物取引規制
差金決済
下げ足
下げ一服
指し値
差し引き融資残高
様変わり
三市場信用取引残高
残存元本
散発高
三分の一押し（戻し）
塩漬け
仕掛け難
時価転換社債

時価発行
時価発行規制撤廃
時価発行ルール
直取引
仕切り販売
仕切り売買
自己売買基準
自己売買業務
自己融資
シコリ
資産再評価
資産三分法
支持線
下支え
下値支持線
下放れ
失念株
実物取引
指定替え
品借り料
資本準備金
資本装備率
締まる
週間展望
従業員持ち株制度
集中投資
受注産業株
循環買い
循環物色
償還
償還株式
償還期間
少額配当
償却対象資産
証券監督者機構
証券団体協議会
証券取引審議会
証券取引所
証券取引等監視委員会
証券取引法
証券分析
証券民主化運動
小反発
消費関連株
小浮動
処分売り
所有期間利回り
使用総資本
場外取引
上伸
上場審査基準
上場廃止基準
上場銘柄
新株発行
新株引受け権
新株引受け権証書
新規買い（売り）
新規公開株課税
信義則違反
申告分離課税
新高（安）値更新銘柄
信託期間
信託財産
信託報酬
新薬関連株
信用取引
信用取引期間
信用取引口座
信用取引口座管理費
信用取引口座設定約諾書
信用取引売買益課税
信用取引銘柄
信用取引銘柄別残高
水準訂正相場
据え置き
スターリン暴落
成功報酬制度
成長株
税引き前利益
税引き利益
政府保証債
整理
整理商状
整理ポスト
是正保全命令
設定
設備投資関連株
説明義務
全員参加型相場
選択タイプ株式投信
先導株比率
全値押し
選別買い
選別投資
全面規制
総合利回り
増益率
増額修正
増資
増資圧迫
増資間隔
増資減配

増資採算
増資調整
増資等調整懇談会
総資本回転率
増収増（減）益
増収率
総投げ
増配
相場操縦
底入れ
底固め
底値たんれん
損益計算書
損益分岐点
損失保証
損失補填
損出しクロス
第三者割り当て
貸借対照表
貸借取引
貸借平均の原則
貸借銘柄指定基準
大証修正平均株価
代用証券
大量売買取引
ダウ採用銘柄
ダウ防衛
高値覚え
高値警戒
高値つかみ
高値引け
高寄り
抱き合わせ増資
他社株転換可能債
打診買い
立ち会い
立ち会い外分売
立ち会い時間外取引
立ち会い場分売
棚卸資産回転率
玉もたれ
だれる
短期投資
単純平均株価
単純平均株価トレンド
単独上場銘柄
担保掛け目
担保化否定条項
地方取引所
ちゃぶつく
注意銘柄
中間決算
中間配当
中間発行
中間反騰
抽選償還
長期投資
ちょうちん買い
帳簿閲覧権
追加設定
追撃売り
追随高
追随安
月変わり商い
突っ込み警戒
積立型投信
強含み
強もちあい
つれ高
つれ安
出合う
提案権
定額投資法
抵抗線
停止基準
訂正有価証券報告書
定率投資法
出来ず
出来高
出来高ベストテン
出来値
手じまい売り（買い）
手詰まり
出直り
デノミ関連株
手張り
手控え
手元流動性
手元流動性比率
転換売り
転換価格
転換株式
転換社債
転換社債・ワラント債関連税
転換社債基準金利
転換社債権
転換社債市場
転換社債償還期間
転換社債相場表
転換社債単純平均
転換社債ファンド
転換請求期間

電子取引ネットワーク
店頭株の委託手数料
店頭株の受け渡し
店頭株の投資勧誘
店頭株の取引単位
店頭株の売買
店頭公開の第二基準
店頭登録扱い銘柄
店頭登録銘柄
店頭取引
店内整理
転売
投機筋のカラ売り
投資案内（相談）
投資格言
投資勘定
投資基準
投資クラブ
投資顧問業
投資顧問業法
投資信託
投資信託関連税
投資信託会社の認可制
投資情報サイト
投資制限制度
投資選択基準の三条件
投資八原則
東証の適時情報開示義務
投信委託会社
投信組み入れ株
当日決済取引
騰落銘柄数
登録株売却税
登録銘柄ディーラー制度
特別配当
解け合い
途中償還
途中償還型転換社債
飛ばし
飛びつき買い
とめ足
取組み
取引所外取引
努力相場
ドル・コスト平均法
内部留保
投げ
投げ一巡
成り行き注文
なれあい売買
ナンピン買い（売り）
25日移動平均線
日経平均株価
200日移動平均線
日本共同証券
日本投資者保護基金
荷もたれ感
任意積立金
人気買い
抜く
値ザヤかせぎ
値ザヤ取り
値つき
値つき率
値つけ株
値幅制限
値幅整理
値ぼれ買い
伸び悩み
乗り換え
売却益（キャピタル・ゲイン）
配当
配当落ち
配当課税
配当可能限度
配当公約
配当自由化
配当制限
配当性向
配当性向主義
配当取り
配当率
売買一任勘定
売買損失準備金
売買単位
売買単価
売買代金
売買取引の種類
売買の原則
売買報告書
売買基準価格
計らい注文
始値
裸利回り
場違い筋
発行価格
発行市場
発行条件
発行日取引
バブル経済崩壊相場
半期報告書
反省安

反対売買
反騰
半日立ち会い
半値押し
半値戻し
反発
反落
日柄整理
引当金
引受け業務
ビッグバン実施事項
日計り商い
日々公表銘柄
評価性引当金
表面利回り
吹き値売り
含み資産株
複利運用
不公正取引の禁止
負債性引当金
普通取引
普通配当
物色売り
物色買い
物色買い人気
物色銘柄
踏み
踏み上げ
踏み上げ相場
部分物色
付与率
振り替え決済制度
プレミアム還元
プログラム売買
粉飾決算
分散投資
分散投資法
分配金
分配準備金
分配管理
平均利回り
並行増資
平日立ち会い
変率投資法
棒上げ
棒下げ
法人買い（売り）
防戦買い
法定準備金
暴騰
崩落
暴落
保険つなぎ
ぼける
保護預かり
募集・売り出し業務
本格反騰
マージン取引
前引け
任せ玉
曲がる
増し担保
見送り人気
未決済勘定
未公開株流通市場
見直し買い
みなし配当課税
無議決権株
無形固定資産
無差別買い
むし返す
無償交付
無担保転換社債
無配転落
名義書き換え
名義書き換え停止期間
名義書き換え日数
名義貸し
もちあい
もちあい放れ
持ち株会社
戻す
戻り足
戻り売り
戻り高値
もみ合い
模様眺め
約定代金
約定値段
安値覚え
安値引け
安寄り
山一証券の自主廃業
ヤリ気配
やれやれ売り
有価証券届出書
有価証券届出制度
有価証券取引税
有価証券含み益
有価証券報告書
有価固定資産
融資金利

融資残
有償増資
優先株
輸出関連株
預金保険制度
翌月受け渡し
余資運用
予想配当
予想平均利回り
予想利回り
四日目取引
呼び値
寄りつき
弱含み
弱もちあい
利益準備金
利益伸び率
利益留保性引当金
利食い売り
理想買い
利付債
利回り
利回り銘柄
流通価格
流通市場
流動資産
流動比率
流動負債
両建て
臨時報告書
連結決算
連結納税制度
連想売り
連想買い
ろうばい売り
割引型転換社債
割引国債
割引債
割増償還金付き社債
悪目買い

# A Linguistic Note on Japanese Equity Terms

Hitoshi NAKATA

This paper has two purposes: one is to make a linguistic analysis of Japanese equity terms, which contain an abundance of interesting compound words, and the other is to make clearer the definition of technical terms.